

不甲斐ない先輩

第13期 山本 彩理

小野ゼミの門を叩いて早2年。目の前には「卒業」の2文字が並ぶ。小野先生・先輩方への感謝の気持ちや同期への言葉など、書きたいことは多々あるが、私は、本稿を第14期生に捧げることとする。それは、私自身、4年に進級した当初、自分の小野ゼミでの進退に悩んだからである。

昨年の4月に第14期生を迎え入れて間もなくは、理想の先輩像とはいかなるものかを真剣に考えたものである。「1年も小野ゼミで学んだのだから」と、最終的には「先輩風」を吹かそうという結論に至った。

しかし、4年生として迎えた小野ゼミでの日々は、想像を絶するほど、プライドと自信を無くす日々だった。私の1年は、なかなか思い通りにいかない就職活動で幕を開けた。就職活動が一段落したのち、大学生活最後の夏休みに入ったかと思えば、夏ケース解題班の一員として過ごし、幾度も壁にぶつかった。もともと予定していたケース案が8月中旬に白紙に戻り、新たなケース案を考え着的なもの、資料完成が夏合宿に間に合わなかった。夏ケースの代替案として、第14期生の有志チームがつくってくれたケース案と一緒に解くということをお野先生と相談させていただき、皆さんの目の前でその発表をしたときのことは、今でも忘れられない。あまりの不甲斐なさにこぼれ出そうな涙を見せまいと必死だった。

そんなことがあったものだから、秋学期からは、「第14期生に少しでも同じ目線にいる先輩でありたい」と思うようになった。KUBIC, GBCC, KSMS, 天然ガストラックマケコン, 神戸マケコン...。「また出るの？すごいね」と思わず声が漏れてしまうほどの有志企画に参加する第14期生に対し、私にもできることはないかを模索しながら、「スライドはこうしたほうがいい」、「その表現は誤解を生む」などと言っていくうちに、口うるさいおばさんのポジションを確立したのである。

秋学期も後半に差し掛かり、またしても私はやらかしてしまった。4年の宿命...卒論である。「好きなテーマの研究ができる」とワクワクしながら始めた卒論であったが、自分のミスが多いゆえに合格をいただくことができず、同期との進捗の差はどんどん開いていった。こんなにも自分との戦いが、孤独だとは思わなかった。こんなにも自分の弱さを目の当たりにし、悔しいと思ったことは今までになかった。

私がそんなであったから、「4年生って辛そう...」と第14期生をさぞ震え上がらせてしまったであろう。申し訳ない。なんとも不甲斐ない。私は、かっこいい先輩にはなれなかった。それでも、小野ゼミはそんな私を受け入れてくれたのである。だから、第14期生のみんなもきっと大丈夫。小野先生、大学院生の方々、OB・OGの方々、そして我らが第13期生...。君たちには、悩める時、苦しい時、嬉しい時を、共に分かち合ってくれる存在がいるのだということを忘れないでほしい。私もいつでも相談にのるから...